



報告記

10 セン

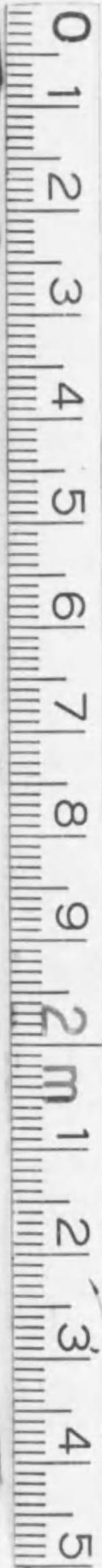
ゆるりゆるり隊

皇軍慰問の旅

特252

928

石丸 松 著



始



特252
928

京山 石田
若丸 一松
共著

皇軍慰問の旅

あらあし 隊報告記

亞細亞出版社版



目次

一、北支の巻

京山若丸

- (イ) 天津港……………(三)
- (ロ) 前線彰徳……………(八)
- (ハ) 袁世凱の墓……………(二三)
- (ニ) 支那人の心理……………(二六)
- (ホ) 通州……………(三二)

二、中支の巻

石田一松

- (イ) 上海……………(二四)
- (ロ) 南京へ……………(三〇)
- (ニ) 西湖のほとり……………(三七)

皇軍慰問の旅
あらわし隊報告記

一、北支の巻

京山若丸

|| 天津港 ||

大連で傷病兵の慰問を終つた、北支班笑はし隊の一行、柳家金語樓、柳家三龜松、花菱アチヤコ、千歳家今男、私等は、北京丸に乗込んで天津へ向つた。
北京丸は處女航海を終つたばかりの二度目の航海で、ケビンはもとより、凡てにすがすがしい気分がして乗心地が善かつた、

私は大正六年から十六年間、毎年のやうに支那、滿洲方面へ興行に出かけてゐるが、慰問の旅は此度が二回目である。だが慰問と云ふと、普通の興行の旅と違つて、自分も何だか征途につくやうな、雄々しい氣持になるのも不思議だ。

この航海では、柳家金語樓さんが三龜松さんを調弄つてゐるのが面白かつた。なんしろ三龜松さんは、神戸以西へは旅したことがないと云ふのだから、江戸ッ兒らしく強がつてはゐるものゝ、何だか心細そうな色が面に現はれてゐた。

「三龜さん、お前さん船は大丈夫かい？」

金語樓さんはニヤ／＼と笑つて、三龜さんの背中を叩いた。この人は、かつては羅南の七十九聯隊へ入營して、二年間ゐて二等卒で歸つて來たと云ふ、この一行では唯一の軍醫者なんだから、わが輩が一番がつちりしてゐるぞと云ふ自信を持つてゐたやうである。

その辭歸國の時には、この人一人だけ病氣して一船遅れたんだから皮肉である。尤もこの人は落語家（落伍家）ぢやから、それも理の當然なのかも知れない。

情金語樓氏に揶揄された三龜さんは、

「なあに大丈夫だ。あつしや酒に酔ふのは好きだが、船に酔ふなんてべら棒なことはしねえよ」と、巻舌で大きくたんか切つたのだが、船が揺れ出すと、なんだかそれも怪しくなつて來た。

「三龜さんいよ／＼いけないよ。お前さん顔色が蒼白になつて來たやうだぜ。吐き出すと苦しいから、瘦我慢は張らずに横になつてゐた方がいよ。なんなら背中をさすらうか」

金語樓氏は又ネチ／＼と脅しにかゝつた。

「平氣だよ、僕の顔色の白いのは自前なんだから、ウーム……………」三龜さん、そう云ひ乍ら變な唸り聲を出し始めた。

處がこれは何としたことであらう、今まで大きな顔をしてゐた金語樓氏も、

「ウーム」と唸つて、手拭ひで鉢巻をし始めたのである。その手拭ひもあの人の頭を結ぶには二三度滑つたが……………」

三龜さんも鉢巻をして、唸り乍ら起きてゐたが、何時か我慢が出来なくなつたと見え、二人共ごろりと横になつてしまつた。

變な處で意地を張つたものだ。最初からわれ／＼のやうに寝轉んでおれば、苦しい思ひをしなくて済んだものを。――

六

天津の港へ着く。此處には白河の流れが注いでゐる。これは九十九曲りしてゐて、百曲りに一つ足りないと言はれてゐる位ぬくぬつてゐる河で、水は土と水が半分々々のよどんだ色をしてゐて、白河と云ふ名前がおかしいくらいだ。大黄河になると、水三分土七分の流れとなつてゐるから、此處で溺れた男はほんとに土左衛門になれる。

港の入口に大沽、塘沽の砲臺がある。塘沽は蔣介石自慢の造船所があつた處で、わが艦隊はこれを二里沖の海上から砲撃したのだが、この造船所は滅茶々に破損したにも關はず、近所の民家には一發も砲弾を落下させなかつた程、完璧の照準を誇つたものであつた。

事變前は河へ這入ると、支那の子供等は岸に立つて、兩手を重ねてスツポンの型をして見せ、「ワンバ！ ワンバ！」と言つて罵聲をあげたものだと言ふ。ワンバとは母を姦すと云ふ意味で、最大の侮蔑を含んだ言葉なのだ。

蔣介石はこうした心理を利用して、日本軍を毀損した宣傳をして、

「日本軍は怖いぞ！ だからお前等は何處までも日本人に抵抗しなければならぬ」と、繪入りのピラ、ポスターを撒布したと云ふ。

なほこの白河は支那ジャンクの通行を遮断し、千噸以上の船舶を通さないで、北支では材木、長さ二間、三寸角の杉材が一本二十五圓にもなつてゐると訊いた。

又白河の流域には曠漠とした葦の原があるが、一目これを見た人は誰もが、

「あれを開墾して田にしたらいゝだらう」と云ふが、それは事情を何も知らぬ人が云ふ言葉でほんとは曹達賢で、全々耕作には適さない由である。

山海關から北京までの北寧線、これは今英國の權益に屬してゐるが、わが滿鐵では、これを手中に納めるべく交渉中とのことである。だが英國は高いことを云つて手放しそうにもない。もしいよ／＼駄目となれば、

「線路はお前のものだが、土地は此方に権利もあるんだから」と云ふ譯で、その線路の横にもう一つ線路をつける覺悟で、土あげをやつてゐる處もあると、某滿鐵理事は私に語つた、

七

前線 彰徳

入

前線彰徳我々一行は、北京からいよいよ前線へ向けて出發することになった。列車と云つても客車ではない。全部が貨物列車で、一等待遇の吾々でさへ、板敷の上にアンペラ一枚と云ふひどいものだつた。

そして列車の中では質の善くない炭火をドン／＼と焚いてゐるので、すぐに頭がガン／＼割れる程痛くなるのである。私は石家莊へ行く途中、とてももう自分の命は持つまいと思つた。そして大阪へ残して来た妻子に對して遺書をしたゝめることにした。

「アチャヤン、僕はもう覺悟をした、直接銃はとらなくても、皇軍のお役に立つて死ぬると思へば、これも男子の本懐ですわ、僕が死んだらこの書置、女房の奴に手渡してんか——」
私は手紙をアチャコ氏に托したのである。

「えらい心細いこと云よんやなあ。われ／＼の仕事はこれからだつせ」
「それは判つたあるが、わしも六十一歳、誰よりもかけ離れて年とるんやから、この寒さ、過

勞、何時ぼつこり逝くか判らへん。その時の用意ですわ。頼みましたぜ！」

と、つひ私も自分の年のことを考へると、一行の人々と共に太刀打ちが出来るか如何かが心配になつた。

幸ひにそれは杞憂に終つたが、一頃はほんとうに、ぼつこりいつて仕舞ふんぢやないかと、氣が氣ぢやなかつた。

石家莊から最前線の彰徳へ！ これは又コトリコトリと途中の驛へ汽車が停るので、三十八時間かゝつた。

もうこのあたりになると、時々敗殘兵が匪賊となつて線路近くへ出沒するのである。そう云ふことを訊かされてゐると、乗つてゐてもいゝ心地はしない。今にも匪賊が現はれてボン／＼とやられやしないか、驀進してゐる列車が一度に爆破されやしないか、そんなことばかりが氣にかゝる。

もし匪賊に襲はれたら、この一日に一回しか出ない列車もそれつきりなのである。護衛の兵隊も幾らも乗込んでゐない。これでは手も足も出る譯がない、それが進行の途中でバツタリ

停つてしまった。

「いけない、匪賊の襲来だ！」と言ふのである。

なんしろこのあたりの收残兵ときては、上海が落ちてゐることも、南京が落ちてゐることも知らず、いきりたつてゐるんだから物凄い限りだ。とまれ私はもう觀念の眼を閉ぢて靜かになり行きに任かせてゐた。と、澄みきつた耳元へ、新内流しの音じめが送られて來た。おやと思つて四圍を見ると、三龜松師匠の姿が見えない。やがてあの人お得意の口笛の蟲の音が哀切な響を送つてくる。

鼻息の強いあの江戸ッ兒は、この息づまる雰圍氣の中で、平然とした顔をして、列車の外を流して歩いてゐるのだ。三龜さんらしいやり方だと思つた。艦上で尺八千鳥の曲に恍惚とした風流武人八代艦長の古事を思ひ浮かべたのであらうか？

新内流しのお蔭でもあるまいが、匪賊襲来の杞憂はお流れとなり、再び列車は進行し始めて一行は最前線彰徳の街へ這入り、旅團司令部内の宿舎に這入つた。

この街は戦前二十八萬からある街だつた相だが、戦禍の巷となつては灰色の死の街と化し去

つてゐる。

堺司令官は心からわれ／＼を歓迎してくれた。そして面白いのは、響應してくれるビールが零下二十二度の寒さで凍つており、それを飲むにはお酒のやうに燗をして飲まねばならぬことである。

それから司令部の一室のベットに休むと、兵隊さんが代りばんこにストーブの石炭を入れにきてくれるのだ。これには私も恐縮して「此處のストーブは自分等が代り番こにやりますから、どうかお休み下さい」とお断りしたが、どうしても訊いてはくれず、明方まで入替り立替り世話をしてくれた。

慰問に來たわれ／＼が、前線で働く兵隊さんに面倒をかけては申譯がないのだが、向ふ様では一寸ともそんな事を意に介せず、人懐かしがつて好意的に接待してくれたのだ。

特に私等の寢室へ這入つて來られた兵隊さん等は、金語樓、アチャコ氏の寢顔を見ては、「面白い顔をしてゐるなあ」と感心して出て行くのである。

翌日訊いてみると、その晩ストーブを焚いてくれた兵士は四十八人あつた相である。これで

は忠臣蔵の四十七士よりも一人多い譯で、われ／＼は兵隊さんの親切に、衷心から感激した。

此處では度々敵機の空襲があると云つて脅かされた。最初は今にも爆弾が落ちて来やしないかと思つて足も立竦む思ひだつたが、馴れてくるとそれも平氣になつた。

それと云ふのも自分が度胸がいゝ爲ではなく、兵隊さんが朗らかな顔をして唄つたり踊つたりしてゐるのにひき入れられた爲であつた。

兵隊さん等は、空襲だと云つても、一向驚ろかず、レコードの櫻音頭に合はせて唄つたり踊つたりしてゐる。

「大丈夫ですか？」と訊くと、

「心配はいらんよ。敵機は千五百米から降りては来ないんだ。そんな爆弾がわが軍に當りつことはないよ」と云つて笑つてゐた。

此方へきて感心させられた事は、鐘紡の慰問品であつた。鐘紡は至る處の部隊へ、レコード、ラヂオを贈つて、兵隊さんを慰めてゐるのだ。ラヂオは無線でも、實際は相當お金がかかるであらうに、よくやつたものだ。今更乍ら驚嘆した。無論此處のラヂオもレコードも鐘紡から贈

つたものであつた。

此處には軍隊きつての命知らちと云はれてゐる、志村軍曹と云ふ方がゐられた。その志村軍曹は、

「敵の爆弾なんか一寸とも怖くない。怖いのは敵襲だと云つて周章てることだ。落付いて事に當れば、怖いことは何もありやしない。國へ歸られたら、この事を皆さんに傳へて欲しい」と云はれた。

今はその志村軍曹も生きてゐられるか如何か？ 面識があつただけに氣にかゝる。

袁世凱の墓

彰徳から一里半、參家莊近くに袁世凱の墓がある。

墓は横一間、高さ二間半の大理石でその表には、

大總統長公世凱墓

とあつた。

墓と云つても淺草觀音様をもつと莊嚴にしたもので、景仁堂と云ふ廣間もあれば、熱河の戦ひに、かつては我軍を苦しめた紅槍隊三百名を養つてゐた宿舎もあり、周圍には松檜の大本が亭々として聳えてゐる。

墓を守るお堂の瓦は、國寶になると云ふ話を訊いたが、なんにしても立派なお墓だ。

われ／＼が行つた時は丁度舊正月で、兵士等は此處の松を伐採して門松を立てた相だが、堺司令官はそれらの部下を戒めて、

「神社や、由緒ある神域は荒してはならぬ」と、敬神の心を鼓吹した由で、其處にもゆかしい上官の態度に心打たれ、一同は頭が下つたとのことであつた。

尤もこのあたりには楊柳アカシヤのみ多くて松の木はないのだ。兵士が松を伐つたのも無理からぬことであつた。

私等は此處で慰問を試みたが、終る頃になつて、砲兵隊百五十人が驅足で馳けつけて來た。なんでも傳令の間違ひで時間を違へた由で、もうその頃にはすつかり夜の帳が下りかけてゐるのだ。

それでも私等は、折角馳けつけられた兵隊さん等を見ると、お断りする氣持にはなれなかつた。再び慰問隊の活躍が始まつたのである。

時は既に暗い夜となり、私等はその中で餘興をやつたが、金語樓氏やアチャコ氏の時には、懐中電燈を顔にさしつけて、その面白い顔を皆さんにお見せすると云ふ並々ならぬ苦心をした。

なんしろ金語樓氏やアチャコ氏の顔は、顔や姿を見てゐて面白さが倍加されるので、唯聲を訊いてゐては面白くないことはないが、その價値が半減されてしまふ。と云つて兵隊さんに懐中電燈も持たせられないからわれ／＼がそれを持つてゐた。お蔭で私は手を棒のやうにしてしまつた。と云つて泣くことを云つてゐるのではない。兵隊さんの勞苦を思へばそんなことは平ちやらだ。かへつて手が棒になつたことが嬉しかつた。

紅槍隊の人々はその間外に立つて、匪賊の襲來に備へてゐてくれた。あの支那の人々にも感謝しなければならぬ。

夜遅く慰問が終ると、私等は彰徳に歸ることになつた。

私等は平氣な顔をして馬車に揺られてゐたのであるが、翌日訊いた處によると、外で暗いので道が判らなくなつて、氣が付いた時には匪賊が出沒する××方面にまで這入り込んでゐた由で、警備の一軍曹は、その時はポケットに手を入れ、シツカト拳銃の柄を握つてゐたのだと云ふ。

私はそれを訊いただけで冷汗をかく思ひがしたが、

「匪賊が出て來たらどうなつたのでせう？」
と訊くと、

「出て來た時にはとても僕一人の手にはおへないから、立派に自決するつもりだつた。君等は藝人だから、見苦しいことがあつてはいかと思ひ、僕は自分の前に君等を射殺するつもりでゐたんだよ。しかし幸ひそんなこともなくて善かつた」と云ひ乍ら、拳銃を取出されたのには、ヒヤリと背筋へ白刃をあてられた思ひがした。

支那人の心理

彰徳から、金語樓、花菱アチャコ、千歳家今男の三君が飛行機で太原へ向けて出發した。

三君が出發すると、私等はその近所の各部隊を慰問して廻はつてゐた。それから私等は四時四十五分の列車で北京へ向けて歸ることになつた。矢張り日に一回しか出ない貨車なのだ。

太原からの金語樓さんの土産語に、

「向ふへ行つて驚ろいたね、支那の兵隊の死骸がごろ／＼してゐるんだ。たまげたね、その死骸が又、首や手の出た處が喰ひ荒されてゐるんだ。案内してくれた兵隊さんに訊くと、これはみんな野犬が喰ひ荒したあとなんだよと云ふことであつた。處がその中に一人だけ頭も顔も手も立派な兵士がゐた。僕は感心のあまり、ハ、アこの野郎は夫婦喧嘩をして來た奴なんですなと云つた。だが、變な顔をして日本の兵隊さんには通じない。つまり夫婦喧嘩は犬も嘯まないと云ふでせうと落をつける、なる程そうだつたか、こ奴は夫婦喧嘩をして來た奴に違ひないと、わが親愛なる兵隊さんは笑ひ乍ら、夫婦喧嘩を連發してくれた。これで僕も幾分暗い氣分から救はれたよ」とニコ／＼笑ひ乍ら語つたが、何處までも落語家らしい話だと、私は感心させられた。

太原に限らず、戦線では、日本の死傷者は凡てかたづけられてゐるが、支那軍の死體はいたる處にごろ／＼してゐるのだ。そしてこれを犬や、烏や、豚までがつつき廻はしてゐるのである。人から訊いた處によると、犬は人間の首から嚙り始めて、臟腑を食ひ、烏は外から肉をつつき、豚は凍つた死體をがり／＼と骨も一緒に食つてしまふ相である。私も、人間が畜生の餌食になるやうになつてはおしまひだと、情ない氣持になつた。平時では人間が平氣で肉食をしてゐるが、戦禍の支那では反對に、豚や犬や烏が人間を食つてゐるのだ。

北京行の列車の中では、日本のスパイを勤め、苦力となり軍の爲に働いた支那人八人と一緒になつた。

彼等は天津近くの、楊村、黄村の人等であつたが、日本軍が南下すると共に、馬、車と共に備はれてついできたのであつたが、軍では土地々々の支那人を使役することになつてゐるので、この人々は不用になつて歸らされるのであつた。そして馬と車だけが軍の方へ買ひ取られ、彼等は體だけ歸國することになつた。

日本の兵隊さんは、大勢私を送つて驛まで出てくれた。

「どうかお丈夫で！」

「有難う！ 君等も體を大切にし給へ！」

口々に別れの挨拶をした。

例車が動き出すと、騎馬の兵士は、線路に添つて馳け出してきて、手を振つて別れを惜しんでくれるのである。私もつい、熱いものが込みあげてきてポロりとさせられた。

八人の支那人は、

「ワー／＼」と奇妙な聲を上げて一せいに泣き出してゐるのだ。

この支那人も皇軍の情に感激して、別れを惜しんでゐるのであらうと、私は思つたのであるが、後で訊いてみるとそれはそうでなかつた。彼等は買ひとられた馬に對して別れを惜しんでゐたのだ。

支那人は親友が殺され、親が討たれ、妻子が殺されても、自分さへ良かつたら、つまり金の爲なら、平然として働ける國民なのだ。これが戦禍に續ぐ戦禍で、歴史が教へる國民性となつてゐるのだ。そうした支那人は、皇軍の恩を感じる、義理も人情も持合はせてゐないが、どう

して馬に別れを惜しむかと云ふと、これは私も経験したことであるが、軍馬を見るとホロリとさせられるものがあるのだ。

皇軍の進撃した後には、アカシヤに縛がれた馬の骨が風雨に晒されてゐる。残つてゐるのは骨とたづなだけだ。そして日本の馬は大きいから一見して判るが、その横には必ず乾麩麩がおかれてゐるのだ。皇軍は突撃に移る時、凡ての持物を投出し、銃剣と、乾麩麩だけを持つて進軍するが、その時でさへ、愛馬には最後の自分の糧食、乾麩麩を與へて、後軍に助けて貰へよと、自分の馬をいたはつてやつてゐるのである。

この心理が同じ人間である支那人にあるからとて不思議ではない。彼等愛馬に別れを惜しんで故郷へ歸つて行つたのである。

柳家三龜松氏は、これらの連中に、色々の品物を買つてやつたり、酒を飲ましたりしてゐた。中に聲樂家だと云ふ男がゐて、三龜松氏に對するお禮のつもりなのか、夜つびて怪しげなる歌を唄はれたのには、私は眠れなくて參つた。

通 州

北京では北京飯店へ宿まつた。これは佛蘭西人經營の一流ホテルである。

私はこの食堂へ遣入つたのであるが、

「此處は英語と支那語でなきやあ通らん」と云はれたので、

「日本軍の支配下にあつて、日本語が通用せんとはどう云ふ譯か？」と一本ねぢ込んでやつた。なんにしても不愉快なホテルであつた間もなく私等は燕樂ホテルへ移つた。

それから私と柳家三龜松氏だけで、通州の守備隊へ慰問に出かけた。此處では如何に支那のスパイ網が巧妙に張りめぐらされてゐるか云ふことを訊かされた。

通州は忘れもしない邦人虐殺のあつた地である。その暴動のあつた前日であつたが、ある果物商の女房が、わが守備隊へきて、

「西瓜を守備隊へ寄附したいが、何聯隊位ゐの人がゐませうか？」と訊いた。わが軍ではそれを好意的に解して、

「では××聯隊分だけ届けてくれ」と云つた。

その翌日あの襲撃が始まつたのである。

堤を破る蟻は、こうしたやうな活躍を續けてゐるのである。

私等は唯一の日本旅館金水樓に宿まつた。その部屋はかつての變時に、旅館の日本人等が水盃をした部屋であつた。

普請こそ新しく建てかはつてゐるが、疊こそまだ新らしい青疊だが、その時と寸分違はぬ家の構へなのだ。

この金水樓には大阪商船が資本を出してゐるのであるが、重役會議があつた時、とりやめになる話が出たが、其處に出席した元金水樓主人は、死んで行つた邦人の靈に對して濟まないから、前と同じ家を建てゝくれないかと極力懇願して、やつとその意見が入れられたと云ふ由緒つきの旅館なのだ。

事變當時、水盃が終る間もなく、支那兵がドヤ／＼と侵入して來た。それまで日本婦人の女中等は、きちんとした身なりをして、とり亂したふうもなく、雄々しい覺悟をしてゐたのであ

る。

支那便衣隊は、一同を珠數繋ぎにすると、裏の廣場へひつたてゝ行つた。この時竹藪の近所で、女中のある一人が、

「お逃げなさい！」と聲をかけた。

この聲が動機で、金水樓の主人も、同盟通信の記者も一早く逃げ出して、九死に一生を得たのである。

そうした思出のある主人としては、どうして金水樓を變なホテルに代えたり、とりやめたりすることが出来よう。彼は敢然と立つて金水樓再建を主張したのである。

「家も御覽の通り建ちました。一同の靈もきつと満足してゐてくれるのでせう。この頃ではあの仲間の夢さへ見ませんよ」

金水樓主人は、わが事なれりと云つた面持で何時までもその頃の思出を語つてくれるのであつた。

二、中支の巻 石田一松

|| 上 海 ||

あの事變で、一體上海方面はどうなつてゐるのかと、僕は戦々惴々とした氣持で乗込んでゐたのであるが、向ふへ着くと、美しい女の子も平氣な顔をして歩いてゐるので僕はやつと安心した。

一行は横山エンタツ、杉浦エノスケ、ミスワカナ、一郎のコンビ、神田ろ山、それから吉本の林さん、日本俱樂部館主片桐さん、この人は撮影機を持つて行つた。それに僕を加へた一行は、長崎から、上海丸の一等船客となつた。

十七日午後一時半には上海へ着き、早速三回の慰問を行つた。

僕等は先づ勳澤部隊、伊佐部隊、中橋部隊の戦傷兵を慰問したが、三回目の時には賀陽宮殿

下が見られてゐた。その時僕等は、

「殿下には途中で立ち退かされると思ふからその時は全員起立してくれるやうに」

と注意されてゐたのであるが、殿下には七時になつても八時となつてもお立ちになる御様子もなく、とうとう九時半になん／＼とする最後の舞臺まで御台覽下されたことを思へば、僕等はいよいよ車輪となつてお勤めしたことであつた。

なほ最高指揮官松井石根閣下にも、前の方で訊いてゐられた。僕の前にやつたミスワカナ、三郎君等が少ししんみりしたことをやつてゐたので、僕は、

「此度は少しお笑ひを申し上げますが、失禮な言葉になりましたらお許し下さい」と前置をして、淺草そのまゝの、さつくばらんの舞臺をお目にかけたのであるが、松井閣下には、僕ののん氣節に對して、

「あゝそうか、あゝそうか」と、一々髭をひねり、頷かれ乍ら笑つてゐられるのだ。

僕も長いこと舞臺をやつてゐるが、唄の途中一々返事をされたのはこれが始めてである。

なんしろそれまでの松井閣下には、大場鎮以來の激戦で、大勢の部下を殺してゐるので、「上

は陛下に對し、下は國民に對して申譯がない」と、それまでは、笑顔一つされたことはなかつた相で、なんにしても石田一松の時事小唄で閣下をお笑はせしたかと思ふと何だか自分も肩身が廣く、ひいてはこれでこそほんとうに慰問の甲斐があつたと、充ち足りた心になるのであつた。

上海の街を歩くと、東京大震災の比ではなく、よくまあこんなに毀したものだと思ひさせられた。此處では上空から爆弾を投下したので、凡て屋根が残つてゐないが、わが空軍の威力を物語るよすがとなるものは、そうした中にあつても、外國の權益は立派に護ると云ふことである。そうした焼野ヶ原に英國のW E Oと云ふビール會社があつたが、其處には一寸ともきづがついてゐないのである。

なほ〇〇本部や兵舎になつてゐる建物は立派に残つてゐるのである。それは空爆に行つたわが精銳が、

「あの建物はわが軍の爲に残しておこうぢやないか」

「そうしよう。ぢやああの建物とあれは残して置くやうに」

こう相談すると、その建物の周囲だけボンボンと爆弾を落すこととして、建物は毀さないやうにするのである。だから支那兵が逃げてしまうと、支那兵さへ毀さない限り、立派にその建物は残つてその夜から早速わが軍の宿舍となつてくれるのである。

この爲にわが軍は、その夜から立派なベットのある部屋に寝られるのである。これらは支那要人の寢室だつたり、上流人のベットなので、わが上等兵あたりの兵隊さんが、其處にのんびりと寝起出来ることになる。――

僕等は萬歳館と云ふホテルへ宿まつた。此處は朝日新聞の支局のある處で、僕は此處で一週間滞在し、二十一箇處の慰問を勤めた。

軍艦、朝日、出雲、〇〇航空隊、〇〇陸戦隊へ行つたが、陸戦隊大河内司令官は、陸軍からも驚異の眼を持つて見られてゐる猛者であるが、僕はこの閣下と親しくお目にかゝることが出来た。

閣下は二千八百の小勢で、北四川路の戦闘に於いて何萬と云ふ敵軍を走らした猛將である。僕は日本にゐた時、ニュース映畫に於て屢々、拜顔の榮に浴してゐたので、僕は閣下にお逢ひ

して、先づその意外にお年を召してゐるのに驚ろいた。ニュースでおに眼かゝると、實に若々しいお顔なんだが、……それでつひ、

「閣下はニュースでお目にかゝると、實に若く見えますが、あれは鐵カブトを冠つてゐるせいなのでせうか？」とお訊きました。すると閣下は、

「鐵カブトは今だつて冠つてゐるよ」と笑ひ乍ら答へられた。

云はれた僕は更めて閣下のおつむを拜見したのであるが、小ピンに白いものがあるだけで、上は綺麗に禿げて、鐵カブトのやうに光つてゐるのだ。

「……………」僕は無言で頭を下げて失禮したが、以來、頭の禿げた人の側では鐵カブトの話をしてはゐけないと云ふことを悟つたのである。

夜の上海は、燈火管制で眞暗である。此邊を歩いてゐると、黒服に黒ゲートルをした日本の陸戦隊に

「誰か？」と云つて誰何される。暗い中に黒いものが立つてゐるから判らないのである。

僕はこれで再三きもつ玉が飛びかへる程驚ろかされた。

だが一度ガーデン・ブリッジを渡つて佛租界に這入ると、煌々とシャンデリヤが輝き晝を欺くばかりなのである。

どうして佛租界と共同租界が別になつてゐるか云ふと、租界は一處にかたまつてくれるやう支那側は要求したのであるが、佛國のみは頭張つて佛租界のみを獨立させたと云ふのである。

この蘇州河には堂々たる船舶が這入つてきて岸へ横づけになる。市の繁榮はこの租界に壟斷された感がある。これではいけないと云ふので蔣介石は數里を離れた閘北方面に市政府を建て、支那人の手によつてより以上の繁榮な街を建設せんとしたのであるが、今はそれも蔣介石の夢の跡で、市政府はこなごなに粉砕されてしまつたが、日本人が上海を再興して、日本人の權益を伸ばすには、矢張りその手が用ひられるんぢやないかと、ある要人は語つてゐた。

大上海は、北の揚子江岸に大新開地となつて新興の姿を現はさなければならぬのである。

とまれ僕はガーデン・ブリッジを渡つてフランス租界へ這入つた。此處は賑やかで一寸とも毀れてゐない。享樂をシンボライズする夜の都會である。だから幾ら燈火管制をしても此處が目標になつて支那側には便利だが、支那側はこの便をさへあまり利用しないらしい。

しかし此處へ這入る時カーキ色の服は禁物である。支那の敗殘兵が随分と逃げ込んでゐるので、日本兵だと思つて狙撃するのである。だから僕等は軍服めいた服を、背廣に着かへて這入つた。

此處で忘れてはならないことは、蔭になつて捨身の働きをしてゐる人等のことだ。

特務機關臼田隊長の部下には、支那浪人、支那通の日本人が宣撫工作の働きをしてゐる、役は抗日分子を捕へ、敵軍の様子を探つたり、絶えず危険に身を晒してゐるのである。だが彼等は、死んでも靖國神社へ祭られることはない人々なのである。皇國興隆の礎にはこうした人々もゐるのだ。

〓 南 京 へ 〓

横山エンタツ、杉浦エノスケ、吉本の林社長と僕の四人は、飛行機で南京へ飛んだ。なんと云つても戦闘機へは始めて乗るので、心の中ではビク／＼ものだつた。飛行機を着ると、係官は、

「乗る前には小便をしておけ！ 機上でやられると機が錆びていかんから」と云はれたので僕は充分に用たしをしておくことを忘れなかつた。

いよ／＼機上に乗込むとなると、バラシユートを背負はされた。

「こんなものを負ふ必要があるんですか」と僕が心細そうに操縦士に訊くと、

「大丈夫ぢやない、この飛行機はもう戦闘には用をなさないので、南京まで行けるかどうか責任はもてないのだ。その時の用意のバラシユートだから」

おや／＼大變なことになつたものだ。しかし今更飛行機はいやだとは云へない。

「外にいゝ飛行機はないのですか？」

「馬鹿を云つちやあいかん。いゝ飛行機は戦闘に使はなければならんぢやないか」

「はあそうですか……」

僕は氣のない返事をして、それでも瘦我慢を張つて機上の人となつた。

「もし落ちた合場ですね、バラシユートはどうして開くんですか？」

僕は念の爲に訊いた。

「バラシユートは両手を放せば自然と開いてくれるものだ、君等は十米も落ちたら、自然に氣が遠くなつて両手を放すよ。それでいゝぢやないか」

なる程、僕は話を訊いただけで、もう氣が遠くなりかけてゐるのだ。

機は時速二百五十キロ！ 南京の空へ向けてブル／＼と飛翔し始めた。戦闘機は胸から上半身を上に出してゐるのだ。ブン／＼と今にも吹き飛ばされ相な強い風に當る。僕は頬をこはばらせ乍ら、

「エンタツさんはどうしてゐるだらう？」と後を見ると、彼の姿が見えないのだ。

あの男はそそつかしいから、吹飛ばされたんではないかとなほも下をみると、彼はしやがんで、下にあいてゐる偵察用の穴へ、一生懸命に、横にあつた新聞紙を筒にして入れようとしてゐるのだ。

「おい／＼何をしてゐるんだい？」

「〇〇だよ。どうも我慢が出来ない」

彼氏、あれ程係官に云はれたのにもかゝわらず、用たしをしておかなかつたのだ。其處へも

つてきて機上の寒さで生理的要求を催したと見える。

エンタツ氏はなほも新聞紙を穴に入れようとするが人間をも飛ばし相な風が、新聞の筒をおとなしく入れる譯がない。

暫くして彼がおとなしくなつたので、

「〇〇は大丈夫なのかい？」と訊くと、

「大丈夫だ。お蔭で済ましたよ」

うまく新聞を利用したなと人事乍ら安心してゐると着いてみると僕の石鹼や齒ぶらしを入れた手さげがない。

「誰か僕の手さげを知らんかい？」と訊くと、

「あゝあれは君の手さげだつたのか。僕は我慢が出来なくなつて、あれに〇〇して入れて捨てちやつたよ」

冗談ぢやない。とんでもない男があつたものだ。

「石鹼や、齒ブラシや、レーザーはどうしたんだ！」

「面倒臭いから一緒に捨てちやつた」

あゝお蔭で僕は南京にゐる間、齒も磨かず、髭も剃らず、顔さへ洗はなかつた。

南京城は北京につぐ大きな城郭である。周囲十里、その要所々々は難攻不落の門があつたのである。なかでも光華門、中山門、中正門は、何れだけが皇軍を泣かしたか知れない。だがこの門も遂にわが軍の手にかゝつては三文（三門）の價値もなく陥落してしまつたのである。自分乍らこれはいゝ洒落だと思ふ。どうしても落がつくやうになつてゐたのである。

此處は國民政府のあつた處で、商業的な街ではない、したがつて官吏が費消する街でこれか何れだけ發展性があるかは疑はしい。と、これはある人が仰有つた。特徴は街の中に電車が通つてゐないことだ。乗物は自動車や句車で用を足すのである。

先年十一月二十八日、蔣介石は要人を集める爲の大講堂を建てた。此處には優に五千人の人間が遣入れるのである。僕等はこの大國民講堂で、日本皇軍の爲の慰問を行つた。

僕はその演壇に立ち乍ら、

「此處には蔣介石も立つたことがある。抗日なんて心がけが悪かつたばかりに此處を追はれた

が、そんなことがなければ、絶対に吾々の立てる處ではないのだ」と思ふと、一しほ感慨無量
のものがあつた。

南京には三日間ゐた。

その一日、雨がシヨボ／＼とビルの屋根を濡らしてゐた。（南京の建物は丸の内のやうに洋
建築が多い）その日僕は街へ出たのであるが、此處の小供等は僕等の姿さへ見れば、「先生々
々」と道をあけて歓迎してゐるのである。

これを見てゐると僕は淋しくなつた。

戦争に負けたら、自分の國にゐる乍ら他國人に遠慮氣兼ねして生きなければならぬのである
こんな悲惨なことが又とあらうか。

こんな處を見せられると、痛切に感ずるのは、戦争をする以上は、石に嚙りついても死んで
も勝たねばならぬと云ふことである。

此處には自治委員會が組織されて、治安は保たれてゐるが、それでも食ふに米もない避難民
が何人ゐるか知れない。彼等は皇軍の手によつて、國民政府がためておいた糧食を分けて貰ふ

のである。

それも自治委員会から身分證明書を貰つた上で米を貰ひにくるが、それも一軒あたり澤山貰へるものではない。たかだか一斗位が關の山だ。そうした人々の中に、品の善さそうな老人と、可愛い、子供がゐた。二人の老人と子供は、貰つた米を嬉し相に棒に通して擔いで行つたが、

「この人等も事變さへなければいゝ御隠居さんでゐられたであらうに」と思ふと、今更乍ら戦禍の無辜の民に及ぼす災害に心膽を寒くしたことであつた。

自分の國にゐて他國の人におべつかを使はねばならぬ彼等は手に手に日の丸の旗を打ち振つてゐるのだ。白地に梅干程の小さい日の丸があるかと思へば、九分通りの地を赤で染めたものもあり、中には長方形、三角形、ひどいになると、それもいゝつもりなのであらうが、

「大日本帝國株式會社」なんて書いた旗もあつた。

そうした旗、日の丸を見るにつけ、僕は日本と云ふ國に生れたことを、何んなに有難いと思つたか知れない。今更乍ら皇恩の無窮に感泣したのである。

|| 西湖のほとり ||

南京から最前線蕪湖へ向けて出發した。

此處では二千米位向ふに敵兵がゐて、

「ドーン／＼」と云ふ砲聲が聞こえ、始めて戦線へ來たと云ふ感じを深くした。

此處では至る處兵隊さんばかりなので、砲聲でもしないと戦争をしてゐるやうな気がしないのだ。

書落したが、南京を出る一夜、××司令官と語つたことを思ひ出した。

「君は酒はいけるか」と老司令官は云はれた。

「ハイ、飲むであります」その道の好きな僕は喜び勇んで答へたのであるが、飲む程に酔ふ程に、司令官も打ちとけて、友達に對するやうな態度で何かと話してくれたのは喜しかった。

「酔つて云ふのではないが……」と司令官は仰有るのである。

「わが荒鷲隊の活躍は物凄かつたよ。南京へ出發する前は、あまり無理をするな。唯上空から

爆弾を落しておどかしておけばいい、と申渡してあつたにもかゝらず、南京空襲をやつた彼等は高層なビルがなか／＼倒れないと知るとさつと地上近くまで下りて来て、高射砲十字砲火の中を、窓近くへ下降してさつと燕返しになる瞬間、窓の中へ爆弾を投入して行くのだ。どうだこんな凄惨な放れ技は、外國の奴等には出来まい」

「驚ろきました」僕は心から感嘆した。

「それからわが輩にこの荒鷲隊をあづけたとしたら、一日で海軍なんか全滅さしてしまふ。みんなの技術が正確ちやから、爆弾一個を完全に煙突の中へ投下して行くのだ。これ即ち一艦一弾主義だ。嘘だと思つたら東京へ歸つたら、(風呂屋の煙突へ爆弾を落して試して見ようか?)これは冗談だが、司令官の意氣や當るべからざるものがあつた。又、

「支那軍は追つては逃げ、戦つては逃げてばかりゐるので問題にならんよ。此度は南京から西へ空爆する場合は、一つ地球を反対に廻はつて、逃げ道をふせぐより仕方がないな。なあに僕でも、まだ／＼地球を一周や二周する元氣はあるから、僕がゐる以上はわが空軍は絶対に大丈夫だ。と、君等は國へ歸つたら銃後の國民に傳へてくれ！」とも云はれたのである。

僕は煙に巻かれると共に、この人がゐる以上は絶対に大丈夫だと心強い氣持になれた。

借前線の蕪湖では、僕も氣が強くなつてなか／＼冒險的なことをやつた。

僕は敵陣を撮影したくてたまらなくなつたので、

「此處から首を出しても大丈夫でせうか」と塙壁の近くにゐた兵隊さんに訊いた。

「駄目だよ。其處から首を出すですぐ敵弾が飛んでくるから」

兵隊さんはこう云つたが、なあに兵隊さんは僕を怖がらしてゐるのだ。たいしたことはあるまいと、僕は首を出して撮影にかゝつたのであるが、途端に、

「ボン／＼」と音がして弾が飛んで来た。

僕はヒヤツとしたが、今更弾が飛んで来たからと云つて、男の意地としてもそのまゝ首をひっこめる譯にはいかない。

「危い／＼」と云ふ兵隊さんの聲を後に、

悠々とした態度で、その實ビク／＼し乍ら撮影を終つた。

片桐さんが撮影した映畫は、東寶の「上海」「南京」あたりへも編輯されたと云ふ話である。

蕪湖が終ると、寒山寺、甘露寺、銀山寺を訪ねた。

寒山寺は、月落ち鳥鳴いての詩で有名な處。だが此處は支那軍が要塞を築いた處で、四圍は滅茶々に破壊され、荒涼の氣が充滿してゐた。

甘露寺はその昔、阿部の仲鷹が、遙かに出た月を眺めて、

三笠の山に出でし月かも——と咏嘆的な歌を詠じた處だ。

その頃の仲鷹の感懐は如何であつたらうか？ 僕も思はず故國日本が戀しくなつて、仲鷹がゐたと云ふ部屋に立つて、遙かなる日本の方へ向いて、そして月ならぬ太陽に向かつて、

「大日本帝國萬歲！」を三唱したことであつた。

こうした寺々の境内には、

「僧侶を殺すべからず——司令部」

と云ふ立札が出てゐるのも一奇であつた。

此處にも神佛に對する、上官の崇拜の念がくみとられて心ゆかしき限りである。次に、杭州西湖に遁入つた。

此處には柳川集團司令部があつた處で、あの杭州金山衛の敵前上陸で、

「日本陸軍百萬上陸」のアドバールン空に浮遊させて、戦はずして支那軍を走らした柳川司令官がゐられたのである。

僕等は此處に四日ばかりゐたが、將軍は三回もわが慰問隊を訊きに來られた。

そして歸る時には、

「僅少ではあるが」と云つて金一封を贈られたのであるが、

「そうしたものを頂いては私等主旨にもとるものですから」とお断り申上げた處、

「ではせめてこれだけでも」と仰せられて、

一人宛に、龍のほりこみのある銀のケースを下された。それをお断りしては失禮に當るので喜んで頂いて歸つたが、僕はこの時の記念として、何時までも大切にしておる考へである。

西湖のあたりは少しも毀されてゐない。それはこのあたりにゐる連中がみんな浙江財閥の金持で、戦はぬ以前から、支那軍に莫大な黄金をバラ撒いて、逃げて貰つたなどと云ふ噂があるくらいである。

西湖のほとりは、上野不忍地を大きくしたやうな處で、その周囲には楊柳や、アカシヤ、櫻の木まであつて風光明媚ふうこうめいびの地とされており、支那人の終生の望みは。

「好きな女を造つて金を溜め、西湖のほとりへ別荘を建てること」と云ふにあるんだ相だ。

ひいて西湖が何んな樂園であるか、想像さうぞうされるであらう。

杭州へ遣入つたわが軍は、早く行つた處が自分の兵舎になるので、わき目もふらずに突とつ喊げんした。こうした意氣が、既に戦はずして敵を呑んでゐた結果になつたのであらう。

僕があちらで困つたのは、便所のないことであつた。お湯に遣入つたり、髻ひげを剃そることは我慢出来るが、あればかりはどうにも我慢が出来ない。尤もそれが我慢出来る人は、出来る人の方でどうかしてゐる。

支那では大便所と云ふものがない。ではどうして用を足すかと云ふと、寢室しんしつには大きな壺があつて、それに用を足すと、翌日婢めいやボーイがある個處に行つて捨てるのである。そんな譯で、小便所はあつても、大WCには僕等は苦勞した。

兵營へいえいなんかに行くと大きな便壺べんぼに何本も板が渡してあつて、何十人でも其處へ遣入つて用を

足すのだ。最初僕が遣入つてゐても、兵隊さんは平氣で遣入つてきてお尻を僕の方へ見せて大便をしてござる。最初は此方の方で大いにてれたが、それも馴れてくるとなんでもなくなつた。人の前で公然と大便をたれるなんて、全くいゝ氣持のものである。

話がおしまひになつて汚なくなつたが、これも最後の雪隠詰せういんづめだと思つて我慢がして頂きたい、

やがて支那軍も、凡て雪隠詰となることを豫言して、僕は筆を擱おく次第である、

附言——向ふでは蔣介石のことを尊稱して蔣中正と云つてゐる。介石とは云はない、介石と云ふのは日本人だけである。

やがて行詰おつまつた抗日の介石が自決をし、その介錯かいしやく(介石)を日本人がしてやるのも、やがて間もないことであらう。(報告了り)

月刊雜誌

喫茶街を中心とした

スマートな流行雜誌

喫茶街

菊判總アートの豪華版

定價三十錢

發行所 亞細亞出版社 振替東京七二五七番

わらわし隊報告記

No. 16 定價十錢

昭和十三年四月十三日印刷
昭和十三年四月十八日發行

著述者 京山 若丸
石田 一松

編輯兼 東京市下谷區車坂町八九番地
發行者 設樂 邦太郎

印刷所 東京市小石川區榑ヶ谷町一四六
大森印刷所

發行所 東京市下谷區車坂町八九番地

配給所 亞細亞出版社

電話下谷(83)四七六七番
振替東京七一、五二七番

月刊『喫茶街』

大阪市北區堂島上二ノ二五
京阪神特約店 新正堂書店

〔特約〕 東京鐵道局公認 (鐵道保養會・鐵道弘濟會) 啓徳社

各縣賣店・ホム・街頭新開スタドン・有名書店ニアリ

終

亞細亞出版社